

海外 論文 & レポート

イギリスの社会的企業 調査研修ノート

Notes on study trip to social enterprises in the UK.

岡安喜三郎（協同総研専務理事）



ヨーク・ミンスターをヨーク市の城壁から眺める。

イギリスでは、今年の7月から「コミュニティ利益会社（Community Interest Company: CIC）」の登録が始まった。CICレギュレータの発表データによると、2005年11月1日段階では42の会社が登録されている。内訳は8月に3社、9月に13社、10月に23社という登録であることが分かる。そのテンポをみると、今後増えていくと推測されるので、しばらく注視し続けたい。

今回のイギリス調査は当研究所の中川雄一郎理事長が継続調査してきたいくつかの社会的企業の活動を視察することに重点を置いた。

[] 研修概要

1. 訪問期間、参加者等

2005年9月1日から10日まで、「イギリスの社会的企業」調査研修のため、イングランド地方北部サンダーランド市、東ロンドンのタワー・ハムレット地区を訪問した。また途中、以上の調査に先立って、リーズ大学ヨーク・セント・ジョンズ・カレッジを表敬訪問し、そこで大学のチャペルないで育てている「ひろしまの樹」（日本の大学生協連の寄贈）を紹介され、また2003年にCo-operative Union（生協を代表する組織と案内される連合会）とICOM（労協等の連合会）が合併・一緒になった後の話を直接聞くのが目的で、マンチェスター市にあるCo-operativesUKの本部を訪問をした。

今回の「イギリスの社会的企業」調査研修は、先に当研究所理事長の中川雄一郎明治大学教授執筆による「社会的企業とコミュニティの再生～イギリスでの試みに学ぶ」



マンチェスターのCo-operativesUKの本部ビルの前で、デーヴィッドさんと。

(大月書店2005年4月刊)に触発された当研究所理事村山節子さんの仲間であるワーカーズ・コ・プ・キュービックやコープかながわ国際活動グループの皆さんの発議を中川理事長が受けることによって実現したものである。

今回の調査の参加者は他に、ILO 駐日代表の堀内光子さん(マンチェスター、サンダーランド)、明治大学教授柳沢敏勝さん(サンダーランド)、リーズ大学ヨーク・セント・ジョン・カレッジ中村久司さん、中川亮子さんである。

2. 調査訪問地

今回の研修で訪問および聞き取りしたところは以下の通りである。

- (1) 社会的企業サンダーランド (SES) 本部
- (2) コミュニティ・カフェ「オッジーズ・カフェ」
- (3) 託児所協同組合「シャイニーロウ・チャイルドケア・コープ (SRC)」
- (4) 学童保育「ザ・ハイヴ」(7)、演劇協同組合「フラバガスト・アート」
- (5) 「サンダーランド・ホームケア・アソシ

エイツ」(聞き取り)

- (6) 「ヴァリーロード・コミュニティ小学校」
- (7) 「アカウント3」、「フェア・ファイナンス」
- (8) 開発トラスト団体「環境トラスト」

なお、リーズ大学ヨーク・セント・ジョンズ・カレッジおよびCo-operativesUKの訪問は別の機会に報告する。

【 】 訪問先報告要約

(1) 社会的企業サンダーランド (SES) 本部

サンダーランド市はニューキャッスルから約20キロメートル離れた北海に面する元造船と炭鉱の街で、人口は約28万人(2001年人口調査による)産業やエネルギー転換に翻弄された街である。現在は日産の工場が雇用面で一大産業であると何回も強調された。

社会的企業サンダーランド(SES)の本部事務所のある「ヘンドン協同組合センター」の建物は、サンダーランド港の南側に広がるヘンドン地区にあるにある。造船業の衰退をまともに受けた地域と見て取れる。先ずは新しい責任者であるケヴィン・マークイスさんがSESの概括を説明した。

【SES 紹介】

SESはサンダーランド市の社会的企業の連合組織(ネットワーク組織)である。現在SESが直接援助している社会的企業は29団体(SES 本体も含む)そこで働く労働者は

2005年6月段階で399人、フルタイム対パートタイム比率はほぼ6:4。事業高は610万ポンド(約13億円)である。他にサンダーランド・コミュニティ企業ネットワーク(SCEN)の創立団体の一員として活躍している。SESの紹介パンフレットによれば、このSCENに加入する8団体の活躍は2003年3月31日集約で、サンダーランド市の最も貧しい地域で137の事業をスタートさせ、12ヶ月を超えて継続したのは119事業、17,546人が見学や接触を図り、地元の住民が就いた仕事数1,376、ボランティア120グループと報告している。

SESの組織性格は、国家地方自治体、特定の組織(宗教)から独立しており、法的地位は産業共済組合法(Industry & Provident Society法)による。

SESは現在大きく3つの目標で活動している。

1) サンダーランド市全域での協同組合と社会的企業の振興、開発、支援

思想、立ち上げ、維持へ

2) サンダーランドで最も排除されたコミュニティや住民達を再生したり社会的包み込みのための企業の活用

協同組合組織にこだわらず、雇用と産業の育成のために企業一般も支援する。大切な点はドアステップ。貧しい地域で仕事をおこすにはその地域に窓口がなくては。人材、情報(Know-How)の交換

3) 地域プロジェクトの提案

大きな視点からの地域ニーズの掘り起こし。1989年から90年にかけて90人の大学生を使って地域調査を行い、地域のニーズ(「地域に何が必要か」)を発掘した。これが



SESの責任者のケヴィン・マークイスさんからSESの概略説明を受ける

ら、小学校、FishQuay、スポーツセンターを企画、具体化した。

SESの各企業・協同組合はEU(欧州連合)やLotto(宝くじの一種)等からの資金援助を大きく受けているが、EUの援助は2005年で最終、拡大EUの関係等で資金は東欧重視となると思われ、もうイギリスのここには来ないであろうとの推測していた。

【ペニウェル・コミュニティ・ビジネスの整理・解散】

一方で、15年前に立ち上げ、高失業率、低識字率の地域を抱えるペニウェル地区で大きな役割を果たしてきた「ペニウェル・コミュニティ・ビジネス(労働者80人)が2004年に整理・解散(liquidation)になったこと話題になった。3年前にマークさんという優秀なトップリーダーがこの組織を去り(他の事業立ち上げのため)、他のリーダーに変わって2年、栄光のペニウェル・コミュニティ・ビジネスは整理・解散となった。「マネジメントの失敗」「不適当なトップ人選」「トップと財政担当のコミュニケーション欠

如」等の理由であるとの説明であった。質問後の再説明では、SESからの支援を申し出た時には、「うちは独立した組織なのだから」と、支援を断られたとのこと。また、「不適當なトップの交代」は、多様なステーキホルダーの理事の下で困難だったとも。(理事会運営を含めて)おそらくまともなマネジメントになっていなかった結末であろう。

ケヴィンさんは、「失敗は29分の1という小さな割合であり、リスク率は他の通常の企業に較べても低い」、「社会的企業は何か特別の物ではない。計画、資金、マネジメントが他の企業と同様大切なんだ」と力説していた。

(2) コミュニティ・カフェ「オージーズ・カフェ」



コミュニティ・レストラン "OZZIES" この場所は教会のチャペル。レストランは左ドアの奥の一角にある。

教会の一角を時間借りして立ち上げた、今年始まったばかりのコミュニティ・カフェ。形態は労働者協同組合、法的地位はCLG = 有限保証会社)を根拠法としている。7人の組合員の内5人が生活保護を受けていた人たちだった。典型的な仕事起こしの社

会的企業、労働者協同組合。教会も毎日が詰まっている訳でもないので協力した。月曜から金曜までの9時から2時までの営業。商圏は約2000人、1日25～40食。食単価は2.4～2.6ポンドで荒利益率はドリンク類で70%、ホットフードで55～60%。ケアホームへの配食サービスも行っている。時給は5ポンド。

(3) 託児所協同組合「シャイニーロウ・チャイルドケア・コー(SRC)」



Shiny Row の保育所協同組合。労働者協同組合で、法的地位はCLG(有限保証会社)。市との契約で保育料は市からもらう。

今は終了した露天掘り炭鉱の近くにあるシャイニーロウ地区の2家族1棟制2階建て市営住宅の1棟に託児所は存在する。

SRCは6人の組合員による労働者協同組合で、法的地位はCLG = 有限保証会社である。理事は3人。スタッフは全部で11名の保育士有資格者。託児所は0歳から4歳までと、14歳までの学童クラブが対象。夜9時まで預けられ、日曜も(ただし追加料金)。

託児所の建物は市営住宅1棟(2家族用)を市から無償提供されている。ランニング・コストや修理は協同組合持ち。収容能力は9

名まで(2歳以下は3名まで)、託児所は制度的には、最低2名の資格保育士が必要で、9名収容のここでは3名の保育士が必要とのこと。パンフレットが言うには、「スタッフの50%以上がNVQ^(注)レベル3の資格者で、他の2名もレベル3に向かって奮闘中」と。SESはこのNVQ取得のための援助等を含めて様々な支援をしている。

(注)NVQ: National Vocational Qualification(国家職業資格)。医療、保健、福祉、経営、経理、理容・美容、不動産業などあらゆる職種が含まれ、レベルは1から5までであるが、保育士はレベル2と3に収斂される。ちなみに看護婦はレベル4(「世界の社会福祉 - イギリス」旬報社刊 pp.201-202)。レベル2は26週(半年)の研修期間を要し、レベル3は2年間の研修期間を要する。

託児所の料金は、2時間半セッション<1時間55分ケア>56.06ポンド、保険11.75ポンド、割り増し料金10.00ポンド/1人時等と設定されているが、親の負担は無料で、支払は市からされる。すなわちこの託児所は市からの委託である。おもちゃライブラリーという、2時間10ペンス、電池40ペンス、1回まで延長ありという制度もある。また、ペアレント・コース(親コース=育児支援コース)もある。

(4) 学童施設「ザ・ハイヴ」、演劇協同組合「フラバガスト・アート」

ザ・ハイヴは、後述するコミュニティ立小學校に隣接した土地の中にある「学童クラブ」や「託児所」の教育の場となる建物。その建物と周りのまだ造成中の区域のコンセプトは自然や世界を知る総合教育の場とな



子供・幼児参加の演劇“Rhyme Around the Nursery”

る予定で、隣接小學校との密接なつながりを持ったものである。ザ・ハイヴは休みのときや通常でも午後6時まで開いている。その中で演劇協同組合「フラバガスト・アート」の新しいパフォーマンス(出し物)を、子供達と鑑賞した。

フラバガスト・アートは6人の協同組合で、2人がフルタイムである。人形劇とかも含めて演劇は保育園や学校の児童・生徒が対象で、子供との対話型を重視する参加型演劇を追求している。

当日は恥ずかしそうに参加する低学年の児童、場違いじゃないかとの戸惑いを見せて参加していた高学年の少年が印象的であった。出演者女性は24歳、演劇専攻で博士号取得、もうひとりの女性は22歳、この2人がフルタイム組合員である。今後4ヶ月で140カ所の予定(大部分が学校での演目)が入っているとのこと。

営業も大切な活動である。彼女らの作ったチラシをみると、様々な企画演目がある。

“Rhyme Around the Nursery”(半時間)

Cost: £ 75+VAT(£ 13.13) = £ 88.13

“Mask Making Workshop”

Cost: £ 150+VAT(£ 26.25) = £ 176.25

“Movement Session”

Cost: £ 150+VAT(£ 26.25) = £ 176.25

“Playground Games Workshop”

Cost: £ 150+VAT(£ 26.25) = £ 176.25

“Liven up Literacy with Fascinating Fairy Tale Folk”

Cost: £ 65+VAT(£ 11.38) = £ 76.38 / 1.5
時間セッション毎

もしくは、

£ 175+VAT(£ 30.62) = £ 205.62 / 3 セッ
ションのパック

£ 220+VAT(£ 38.50) = £ 258.50 / 4 セッ
ションのパック

“Victorians in Role”(1 時間)

Cost: £ 85+VAT(£ 14.88) = £ 99.88

“Victorian Childhood on Tour”(2 時間)

Cost: £ 150+VAT(£ 26.25) = £ 176.25

“Wartime Childhood on Tour”(2 時間)

Cost: £ 150+VAT(£ 26.25) = £ 176.25

“GREET THE GREEKS”

“Myths and Movement”(半日)

Cost: £ 150+VAT(£ 26.25) = £ 176.25

“Greek Theatre Day”(全日)

Cost: £ 190+VAT(£ 33.25) = £ 223.25

“Tell Us About The Tudors, Shakespeare”(全
日)

Cost: £ 190+VAT(£ 33.25) = £ 223.25

演劇以外に以下のようなことも受けている。
CHANGING CLASSES(コンピュータ室、図
書室、ホール、教室などのデザイン変更)
SET, PROPS AND COSTUME DESIGN(学校
の大道具、小道具や衣装のデザイン)

(5) 「サンダーランド・ホームケ ア・アソシエイツ」(SHCA)

「サンダーランド・ホームケア・アソシ
エイツ」(SHCA)はマーガレット・エリオット
さん率いる高齢者向け在宅介護サービスの
事業所である。今回は訪問ではなく、SES本
部での聞き取りとなった。SHCAには現在
170人が働いている(昨年5月160人)。SES
傘下の社会的企業のうちで、ダントツに大
きい(全SES就労者の43%)。

事業の多角経営という点で、サンダーラ
ンド大学と契約を結び、身体障害者の学生
のサポート、すなわち身の回りの世話やア
カデミック・サポート(ノートとり、本さが
し、コピー、キャンパス内移動支援など)も
行っている。現在、高校生の障害者にもサ
ービスを始めた。

マーガレットさんはこの事業所自体の拡
大を一段落させ、他の場所に「ケア・アンド
・シェア・アソシエイツ」(CSA)を立ち上げ
た。これを傘にして、隣のニューキャッスル
市北シールズ地区に進出した。

また、遠くマンチェスターにおいても設
立を進めている。競合はないのか?の質問
に、類似のものはなく、社会的企業を求め
ている市当局から支援を受けているとのこと。

正にマーガレットさんはSESのヒロイン
である。彼女自身の2回の「失敗」を経て、
この組織の成功を振り返って「常に研修/
トレーニングが成功の秘訣」と言う。

SES前責任者であるジェフさんが言うこ
とには、「政府は最低レベルを決めるので、悪
質・最低の民間業者が出てきた。マーガレ
ットさんはそれをこの地で駆逐した。」

【「労働者協同組合から社会的企業へ」組織変更】

また、組織を「労協形態から社会的企業形態にした」とのこと。動機は節税や資金調達の容易性等々である。メンバーは今までのような直接出資ではなく、トラストを介させた「間接出資」に変えたという。それも51:49などと説明していたが、具体的な仕組みは結構複雑な仕組みらしく、「仕組みは専門家にしか分からない」(マーガレットさん)ようである。このことが一定の「悲劇」を生む。節税を目的に組織変更したにも関わらず、専門家への報酬の金がかかることになった。彼女にすれば「組織変更しない方が良かったかも知れない」と言わしめた複雑さ。わたしも心の中でゲーテの「人は自分が理解しないものを、自分のものとは思わない」という言葉を思い出した。しかしここはドイツではなく経験主義の国イギリス、いずれにしても経験ということであろう。

(6) ヴァリーロード・コミュニティ小学校



学校入り口ホール「歓迎パネル」

ヴァリーロード・コミュニティ小学校は、貧困からの脱出手段として、初等教育と地



児童による日本人訪問客の歓迎会。今日は始業式でした。

域改革に挑戦している学校である。まずは小学校の規模を人数で見ると、生徒数420人(収容力=1クラス30人×2クラス×7学年)、託児所52人。スタッフ84人(理事等含め)全体は約100人で、フルタイムとパートタイムの混合。21人の教員の他、30人の教育アシスタント、18人が給食・朝食等のお世話など。他に事務、メンテナンスなど。スタッフはできるだけ地元から採用しているとのこと。70~80%が地元。「他では20%以下であろう」と説明された。

小学校の建物入り口横には「私達のビジョンを共有しよう」と書かれた看板が掲げられ、入ったホールではビデオ画面に「とても大切な日本のお客様を歓迎いたします」とのメッセージが写し出されていた。私達訪問団は小学校の大ホールに連れていかれたが、そこは小学校全児童と全教員・スタッフの歓迎会であった。「hajimemashite」の唱和と児童からの蘭の花束で、全員感激。

この小学校は基礎教育・初等教育そのものへの挑戦(児童の発達と自発性)とともに、家族や家庭の教育(特に親)、地域との連携を極めて大切にしている。それは彼等

の挑戦の中に見て取れた。「学校が家庭をサポートしないと教育が成り立たない」(ジョージ・スタバート副校長)という。教育当局や社会福祉等と一緒にあってすすめる必要性が強調された。

副校長によって、小学校の建物の中を入り口付近から紹介された。

【HEALTHY LIVING CENTRE】建物入ってすぐ右側)

家庭支援で大切なのは健康。ということで健康生活センターを作ったが、当局が方針を変えたので2年間使われていない。収入を得るために貸して家賃を得ている。今入っているのは子供の精神問題。3~5歳対象、行動・精神の障害の早期発見。

【FAMILY LEARNING】(建物入ってすぐ左側)

子育てできない家庭もあるので、家族学習(親の教育)をすすめる。学校と市当局とは良い関係ではなかった。学校に対する猜疑心があり、正確に理解していない。でも市も親の教育の必要性自体は認識しつつあるとのこと。

そもそもこの学校のコンセプトを、市は認めていなかった。中央政府教育省が、ここを訪問し、学校と同じことを言いはじめたというエピソードもある。

【TRAINING ROOM】入り口奥左側)

親達の余暇活動のコースがある。アカデミックな成人教育はない。調理実習の場もあった。家庭には健康な食事の概念がなく、肥満等が解決しないので、こういう企画は

重要であるとのこと。

【EARLY DAYS NUSERY】(託児所)

「小学校に託児所？」- 入り口から少し奥の左側に託児所はある。3ヶ月から4歳児までを預かる。親の再就職希望者等のために地域に開かれた託児所である。小学校の建物内に併設されている。託児所の入り口にはEUと宝くじ(LOTTO)からの融資で作った旨のプレートが貼ってある。訪問時、0歳児の部屋はお休み時間、4歳児の何人かはMathematicsのコーナー(「要は数字遊びのコーナー」)でお遊び時間だった。

【DINER】(地域に開かれた喫茶・軽食)

「本日のお勧め」としてコーヒーと菓子で2ポンドと案内が出ていた。このダイナーの入り口には親が描いた絵が飾ってあった。「ここは家族全体が学ぶ、芸術や創造力を養う場。親が描いた絵を意識的に飾ることによって、自尊心を育てる」とのこと。

【COMPUTER ROOM】

このような場は他にも一杯できてきたので、以前のように混まなくなった。需要は減退している。現在はバングラデシュや難民に英語を教える。この地域の住民の9%は「英語が外国語」という人たちである。ほぼ20カ国語の言葉が飛び交う地域。

【RECEPTION】(受付)

学校の建物の中心部分は大きな傘を広げたように、そこだけ高い天井になっている。その一見吹き抜け風スペースに円状のカウンターが置かれたとてもオープンな受付。

朝8時から夕方6時まで開いている。

【HALL】

ここで8時15分から朝食を提供する。栄養のみならず学習効果もあるとのこと。

【YELLOW HOUSE】(早期教育の「教室」)

この学校には4つの色分けした「教室群」がある。このイエローと、ブルー、レッド、グリーンである。

イエローが一番下のクラス、日本でいえば幼稚園児くらいか。この教室は3つの部屋、すなわち《数・計算の部屋》、《文字・言葉の部屋》、《芸術・創造性の部屋》となっている。教師やアシスタントのいるそれぞれの部屋を児童は自由に、関心に応じて行き来できる。「画一的な教育」はないようだ。児童は自分で「遊んだ」り、教師やアシスタントに聞いて教わりながら、様々なことを身につける。「この方が、教育効果がある」とのこと。

【GREENHOUSE】

もう一つ訪問した教室はグリーン。9歳から11歳の最上学年である。グリーンの制服を着た児童と正教師1人に、アシスタント2人(内1人は掛け持ち)。この日は学校開始日(始業日)だったので「休み中の出来事」を話し合っていた。

(小学校の経緯は「社会的企業とコミュニティの再生」(中川雄一郎著)に詳しい)

日本でも、文科省肝煎りの「コミュニティ・スクール」の「実践研究的導入」があり、全国25の小学校で進んでいるが、これは公立学校の教育委員会の権限留保内での



高学年の「普通」の教室。丸いテーブルを5～6人が囲む。

導入(「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」第47条の5第7項)という性格である。

(7) 「アカウント3」 「フェア・ファイナンス」

我々はサンダーランド市の印象深いコミュニティ小学校を後にロンドンに向かった。訪問した地域は東ロンドンのタワー・ハムレッツ地区である。

最初の訪問場所「アカウント3」は、会計士の女性3人が立ち上げたことに由来する。訪問して最初のプレゼンは創立者の一人トニー・メレデュー女史から。

1991年に互助の組織から立ち上げ、現在25名のスタッフを擁する規模に発展した。この地域での女性の起業、雇用と訓練の機会を高め、生活の質の向上をめざしている。この地区にはいくつかの不利益が存在している。例えば、言語(英語が母語ではない)、所得など複合的である。

アカウント3は、大きく2つの活動を進めている。1)職業訓練と、2)スモール・ビジネス

スの立ち上げである。

活動上の大きな壁は「職業訓練しても雇用につながらない」という問題が存在することである。企業側にとって採用に重視するのは「実務経験」なのであるが、「職業訓練」は「実務経験」とは看做してくれない。ならばということで我々も、準備を重ね、今年4月に派遣業を開始した。ポイントは、仕事をしたというキャリアを積むことにある。現在、35人をこの組織で雇った形で様々な企業に派遣している。この事業で月五千ポンド(約105万円)の純利益が出ている。この利益は、この事業拡大と職業訓練に還元する。このようにして「力をつける」ことが大事。基金援助に頼らない様、そうすればやりたいことを制約なしに進めることができる。

結局仕事を起こす上で大きな問題は資金である。銀行口座を開くのは移民者にとってはなかなか困難なこと。信用がないからである。したがって仕事起こしにはファイナンス支援が必要なのである。

【フェア・ファイナンス】

続いて「フェア・ファイナンス」社長のフェイゼル・ラーマンさんから、イギリスにおけるクレジット(ローン)一般の背景と、イースト・エンド・マイクロクレジット・コンソーシアムの活動についてプレゼンを受けた。彼はバングラディッシュ出身でかの具ら民銀行に勤めていたので、この活動の経験があったという。

まず前提認識として、イギリスでは20%の成人は金が正常に借りられないという事態がある。年に160億ポンド(約3,300億円)

が高利貸しから借りていると推計できるという。この”non standard lenders”(「異常高利貸金業」)に関わっている人は900万人から1,200万人と思われる。イギリスの特徴は許可無しに誰でも貸金業ができることにある。G8(先進8カ国)の中では最も悪条件で、利率が無規制である。金利は銀行公定歩合(イングランド銀行)が3~4%の一方で、158%とか164%(この組織は雇用5万人、200万人に貸す)また Morses Ltd. は365%、LCC1, 564%などの異常な高利となっている。ロンドンの生活保護者12%、失業者15%、28%は銀行口座なし、51%が1万五千ポンド(約315万円)以下の年収である。

そもそも、政府は経済成長のためには財政出動するが、貧困克服のための貸し付けはやらない。端的に言えば、力がある者は力をつけられるが、有色、女性は不利。ということで、Peer Lending(仲間の連帯保証による貸し付け)を基本とするマイクロクレジット・コンソーシアム(事業連合体)を1999年に立ち上げた。

当面のサービスは金の問題。今年4月から、個人ビジネス・ローン、個人ローン、家の改修ローン、基礎バンキング・サービス(銀行口座を開けるように支援)を開始した。

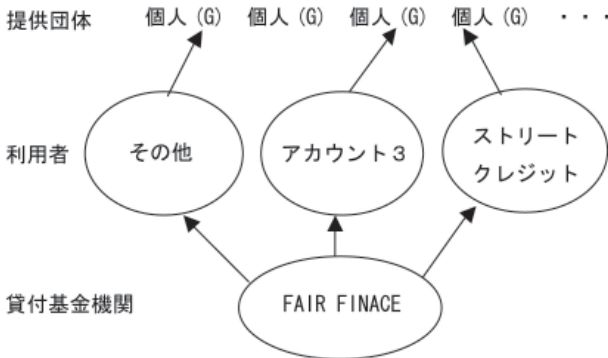
【イースト・エンド・マイクロクレジット・コンソーシアムのコンセプト】

コミュニティを基盤としたパートナーシップの方法を通じて、資金排除と戦う不^u0 活性的な経済に対して自己雇用の促進仲間グループ(Peer Group)による連帯保証

段階的貸し付け(£500.-から£2,000.-ま

で)を通じて成長する小ローン(マイクロクレジット)

【コンソーシアムの機能図】



【Peer Lending(仲間の連帯保証による貸し付け)】

共助グループ、4 ~ 6 人の女性
2ヶ月で返済、社会担保、くり返しローン
段階的貸し付け

【障壁の克服】(金銭面)

小さなローン：£ 500.- から £ 2,000.-
簡単、手ごろ：利率 19%
事業プラン不要、担保不要
段階的、短期間ローン、週毎もしくは月毎の支払い

【障壁の克服】(非金銭面)

小さな支援グループ - 自信となる
その人たちが考える事業、訓練と技能
動機付け、事業サポート
利用しやすいネットワーク
成功や失敗の情報が受けられる

【成果】 2000 年に設立

今まで 350 人以上の女性を助けた
50 のグループによる貸付サークル
ほぼ 300 件のローン
250 以上の新規事業の立ち上げ
25 万ポンド以上の貸し付け

【概観】

利用者の 100% が女性
利用者の 90% がマイノリティ (少数民族)
利用者の 70% 政府の生活保護受給者
借入者の 60% が以前に事業をやったこと
ない人たち
利用者の 50% がシングル女性 (必ずしも
未婚・離婚ではない、ソマリアなどは夫が
出国できない、生活力を証明しないと夫
を呼べない等)

【Peer Lending の限界】

小規模であること
借りるまで時間がかかるということ
急成長事業には段階的のローンは遅すぎる
競争にさらされる
社会担保の結束 / グループ「ゲル」化現象
専門家の支援が得られない
利用者が女性のみであること

(8) 開発トラスト団体「環境トラスト」

引き続いて東ロンドンにある「環境トラスト」という名称の開発トラスト団体を訪問した。チャリティー登録のこの団体は 1979 年につくられ、タワー・ハムレッツ区議会や東ロンドン・ビジネス連盟(ELBA)と

ともに「マイル・エンド・パーク」(地域の再生の為の再開発プロジェクトとして進めた公園)を建設した。

この団体の目的は、主としてロンドンのイースト・エンド地域において、環境を改善し、環境教育を人々に行い、環境に優しい建物を建設することにある。このトラストはこの地域の発展のため、このコミュニティのあらゆるセクタと協働し、アカウント3とも連携をとっている。またイースト・エンド再投資トラスト(EERT)を設立し、マイクロクレジット・コンソーシアムに加わっている。

説明は、ジョン・オルデントンさん。この環境トラストは、自然や社会、経済的環境のみならず、人々のより持続可能な生活を作り上げるために活動している。

開発トラスト運動は実践的な活動であって、3つの原則が強調される。それは、コミュニティ・エンパワーメント、互惠・共助、コモン・ウェルス(共同の財)づくり、である。

【コミュニティ・エンパワーメント】

「人に機会を！」ということである。

メンタリング・サポート

公共サービスの提供(リサイクル等)

マイクロ・クレジット/小規模事業ローン

事業サポート、フェア・ファイナンス

貧困からの解放/節約の指導など、お金の問題/利息とかの指導

手ごろな職場/60カ所作っている

借りやすい住居/市の指定した人にはかなり安く提供する。環境や断熱財によ

て光熱費を年150ポンドになる住宅とか。

【互惠・共助】

「ワーキング・パートナーシップ」

倫理的環境購入制度、グリーン・エネルギー

この団体は、「開発トラスト協会(Development trusts' Association)」の創立会員である。1995年には16団体だったのが、現在全国で350団体へ。

開発トラストという団体は、独立で、コミュニティにリードされ、共に働き、コミュニティ強化に全体論的にアプローチし、財政的持続性を目的としている。

【コモン・ウェルス(共同の財)づくり】

「環境教育」

公共施設/学校のエネルギー節約の意味
相談と実現可能性
土地や施設

【チャレンジ】

インフラとしての太陽光発電/太陽電池を公園の街灯にも

スワンジー(Swansea)湾計画の潮力発電。

ウェールズの生物燃料/木のチップ - 会社を買った

- ・ あたかもビジネスであるが、収益の再投資 - - この活動に今は持続可能になった。

【マイル・エンド・パーク】

太陽電池と風力による発電を使った街灯とか、冷暖房省エネの半地下建物、展示場と

か、水アート化された区画とか、そして何よりも過度に人工化しない（従って雑草も多い）自然との共生とかの説明を聞きながら散策。この公園の建設によって、学校や企業が近隣に進出してきたことも強調された。

まとめ

全体としては、前述した「社会的企業とコミュニティの再生」をベースにしたイギリス視察であった。先行研究者の「ガイド」による視察は、その意味把握において極めて効果的である。あらためて中川理事長に感謝したい。

社会的企業というと、単体企業としての性格（ダブル・ボトムラインとか、EMESの基準とか）や類型化に言及されがちであるが、マイクロクレジットやトラスト運動も含めて、実際はネットワークやコンソーシアムの結成による「社会連帯」の力が息づいていることに特徴が見える。

イタリアにおいても社会的協同組合の行政単位等で結成された事業連合（コンソルチオ）の役割が大きいことを勘案すると、「社会連帯」の価値はもっと強調されて然るべきであろう。



美しいサンダーランドの海岸（Roker Beach）